

まつしろやき 松代焼

長野県知事指定伝統的工芸品
指定年月日：平成26年11月27日



約200年前の江戸時代後期に、松代藩の奨励によって松代地域を中心に盛んに生産され、その後全てが廃窯となったが、昭和40年代に復興を遂げた。

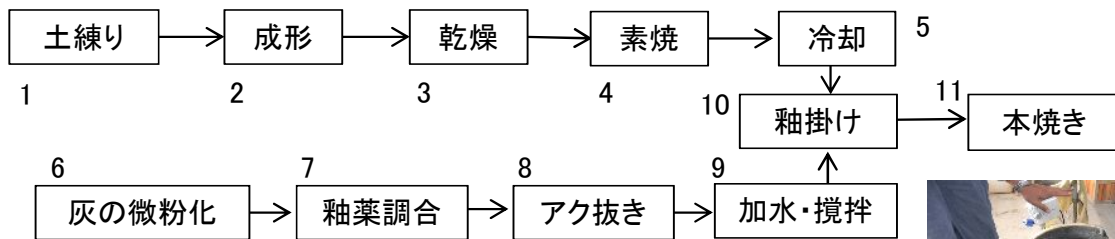
陶土に鉄分の多い地元の粘土等を使用し、天然素材（灰、白土、銅）で調合した釉薬を二重掛けすることで、素朴な造形・風合いと独特の青緑色の光沢を出している。北信地域を代表する焼物として、日常生活で使いやすい食器や花瓶など幅広い製品を生産している。

団体名	松代焼作陶会	長野市松代町清野2120 TEL 026-278-7302	事業者数 5
主な製品	湯呑み、皿、茶碗、小鉢、徳利、花瓶 ほか		
製造地域	長野市		
伝統的な技術・技法	○成形は「ろくろ成形」又は「手ひねり成形」とすること。 ○釉掛けは「二重掛け」とし、釉薬は「灰釉」と「銅釉」とすること。		
伝統的に使用している原材料	○陶土は「松代の粘土」、「篠ノ井の粘土」又はこれらと同等の材質を有するものとする。 ○釉薬に使用する長石は、「小市の白土」又はこれと同等の材質を有するものとする。		

沿革

- ・1795年頃、唐津の地で陶芸を修学した嘉平治（陶工）が窯を築いたのが始まりとされる。
- ・1816年頃、真田藩主・真田幸専が産業振興のため藩窯（はんよう）として奨励し、江州信楽や常滑から陶工を招いて生産されるほか、民窯（みんよう）も盛んになり、日常雑器等が一般家庭に普及した。
- ・その後、交通網が整い他産地から安価な製品が流入したため、次第に松代焼は衰退し、昭和初期には一旦全てが廃窯となった。
- ・昭和40年前後に、長野の文化、松代焼の窯の火をもう一度と、窯跡の発掘調査やかつての事業者への聞き取り、小窯での研究など復興に向けた取組が始まり、製造加工、製作指導の会社も設立された。
- ・昭和47年には新たな窯が造られ、安定的に製造できるようになり、松代焼は本格的な復興を遂げた。

主要製造工程



1	土練り	粘土を真空土練機で練った後、菊練り(水を加える)
2	成形	ろくろ成形又は手ひねり成形
3	乾燥	半月から3か月くらいの間、自然乾燥する
4	素焼	800℃以下で10時間焼く
5	冷却	窯の中で約1日間自然冷却する
6	灰の微粉化	灰を細かくして篩にかける
7	釉薬調合	「灰釉」は粉末状の灰、長石(小市の白土等)を調合 「銅釉」は粉末状の灰、長石(小市の白土等)、銅を調合
8	アク抜き	3～5日間、不純物除去のため上澄みを取る
9	加水・攪拌	適量加水後、沈殿している灰を攪拌しながら施釉
10	釉掛け	二種類の釉薬(灰釉と銅釉)を掛ける
11	本焼き	約3日間、1,200℃以上で焼く



釉薬調合(灰釉・銅釉)



釉掛け



本焼き